

序

夏期の実習調査に沖永良部島の石原遺跡を予定していた。関係者にお目にかかり、中村君を現地に派遣するなど、万端の準備をすすめた。しかし5月下旬、まことに遺憾ないきさつで話が喰い違ってしまった。数日のうちに別の候補地を探さなければ手続きが間に合わないので26日に与論島に飛んだ。かねて名瀬図書館長栄喜久元氏より与論町誌編纂資料蒐集のための調査をすすめられていたからである。懇願し、了解をとり、手続きを踏み、今度は大島の笠利町へ飛んだ。与論のフィールドだけでは実習生を充分には展開できないと判断したからである。帰熊は31日であった。

7月11日、笠利班を連れて出発し、ついで14日、あとを甲元助教授に託して与論に発ち、中村君の率いる与論班と合流した。笠利班は調査班の色あいを持った編成であるが、与論班は文字通りの実習班であった。上学年の者はよく指導し、下級の者も南島の酷暑によく耐えたようである。実習として十分な成果をあげることができた。調査は20日に終了したが滞在を一日延ばして百合ヶ浜に泳いだことも忘れ難い。

なお、調査の実施段階からこの報告書の作製まで、中村君が後見して山口俊博君が一同をとりまとめた。また、この調査が実現したのは主として上記の栄喜久元氏の御厚情によるものであり、実施に際しては町の文化財保護委員野口才蔵氏・教育委員会町田社教課長・領家主事等のお世話にあずかったし、邸内を掘らせていただいた与論民具館主菊千代氏からは物心両面に互る御援助をいただいた。心から謝意を表する次第である。

昭和56年2月10日

白木原和美



与論島航空写真（昭和27年 国土地理院撮影）

例 言

1. 本書は与論島に所在する3ヶ所の遺物散布地調査概要である。
2. 編集には主として山口があたった。執筆は調査参加者の分担による。執筆者は文末に記名した。
3. 遺物の整理および遺物実測図・拓本は調査参加者全員による。

4. 陶磁器の記述については、九州歴史資料館亀井明德氏、文学部講師佐藤伸二氏に指導をお願いした。
5. 貝類の同定は薬学部教官浜田善利氏、獣骨の同定は熊本博物館西岡鉄雄氏をお願いした。
6. 石器の材質鑑定は教養部教官高橋俊正氏をお願いした。
7. 調査参加者は以下の18名である。
 白木原和美 中村 愿 山口俊博 宮本千絵
 河野法子 鳥越のり子 古城史雄 松尾法博
 米倉秀紀 井上靖司 入江久成 坂田和弘
 武内由起子 西谷 大 平井利枝 松田まゆみ
 吉武 学 渡辺千恵

本 文 目 次

一	与論島の位置と環境	1
二	発掘調査の概要	
	I メーサフ・ネッツェ区遺物散布地	
	1. 位置と環境	3
	2. メーサフ遺物散布地	5
	3. ネッツェ遺物散布地	7
	4. 小結	14
	II ヤドウンジョウ遺物散布地	
	1. 位置と環境	15
	2. 層序	17
	3. 出土遺物	18
	4. 小結	21
三	ま と め	22
 付記 採集遺物		
	I	25
	II	26